『夜の寝覚』の宇治十帖引用の方法

―脱却と依存について―

赤迫照子

はじめに

『夜の寝覚』の冒頭は宇治十帖のそれによく似ている。幼くして母を亡くし、父に育てられた姉妹、姉は琵琶、妹は箏の琴、貴公子の偶然の垣間見…宇治十帖と似た要素が幾つも持ち込まれながら、『寝覚』は始まっていく。永井和子氏[1]は、『寝覚』の発端部が宇治十帖に似ているのに、その後は宇治十帖とは異なり、姉妹と男君の三角関係が展開されていくありかたをとりあげて、作者は宇治十帖を読んだ経験のある読者を意識しつつ、宇治十帖との重なりとずらしを持ち味にして物語を織りなしていったのではないかと指摘された。『寝覚』は宇治十帖との類似をみせながらも、姉妹の確執をモチーフのひとつにしているので、永井氏が述べられたとおり、「源氏の大君は恋を妹にゆずってなくなったのであるから、姉妹の間の嫉妬などは成立し得なかった。もし大君がゆずらなかったら、どうなっていたであろうか、という発想が、寝覚の作者の頭に生じたのであるかもしれない」と想像できよう。また、鈴木紀子氏[2]は『寝覚』作者の同母姉妹の宿命への強い興味から、宇治十帖の設定が取り込まれた可能性を示唆された。性急に作家論へと繋げてはならないが、『更級日記』で描かれたように、孝標女と同母の姉との関係が非常に密であったのを思えば、作者の個人的な経験が姉の造型・姉妹関係の描き方に影響しているようにも感じられる。もしかすると作者は、自分の経験から「私だったら、宇治十帖よりも現実味をもった姉妹の物語を描くことが出来るのではないか」という自負を抱いたのかもしれない。

このように、『源氏』が『寝覚』作者に与えた影響や創作の動機付けを様々に忖度しつつ、『寝覚』を概観するのも可能ではある。『源氏』が『寝覚』執筆のヒントになったのだろうし、逆に、『寝覚』作者自身の創作の動機によって、宇治十帖の設定が選びとられ

たと考えられはするのだが、作品自体の問題に引き寄せて、『源氏』との関係をとらえてみることもできよう。本稿の目的は、『源氏』引用の必然性を、『寝覚』の方法として考察することである。宇治十帖を読者に想像させる始まり方をすることで、『寝覚』は何を得たのか。いきなり主題を提示する起筆のありかたや天人降下事件から、『寝覚』が最初から宇治十帖と一線を画す物語を目指しているのは明らかだし、実際、これらの作為が『寝覚』の独自性を強く保証している。だが、物語が宇治十帖の世界に寄り添いつつ出発したというのもまた、事実なのである。このことを、どのようにとらえたらよいのであろうか。以下、『寝覚』と宇治十帖の距離を測りながら、『寝覚』が物語を構築していくありかたを具体的に検討する。

一、宇治十帖からの脱却 ― 大君の造型と三角関係 ―

前掲の永井氏が述べられたように、冒頭部で宇治十帖を下敷きにしながらも、『寝覚』が宇治十帖の単なるコピーにならず、独自性を獲得していく契機の一つに姉妹と男君の三角関係がある。宇治十帖では宇治の大君の自己犠牲の精神が、宇治の姉妹と薫の三角関係が生じる芽を摘んでいた。『寝覚』の大君は、宇治の大君とは違い、妹や男君に嫉妬する。ここでは、『寝覚』の独自の世界を築くのを支えている、大君の造型とその方法についてみてみたい。

大君は、

[1]

①この君(=女君)に、姫君はいま五つばかりが年上にものしたまへば、こ
とごとおとなびたまひにたるを、…　（巻一・二一）

②頭つき、様体いときよげにて、あざやかに気高く、きよらなる
かたち、もてなし、有様も、心恥づかしげに、よしある気色ぞ、
人にことなる。　（同・五五）

③中納言の上は、いと気高く、もの遠きさまして、御けはひもう
るはしく重りかにのみおはすれば、うちとけがたきものに、女
房などもみなつつみきこえて、この君(=女君)は、け近くもらうたげに
もおはすれば、つかうまつるも、いとさぶらひよくのみならひ
たるに、…　（同・六二）

④女君の、いと気高く、恥づかしきさましたるを見るにつけても…
（同・七五）

⑤ものよりことに気高く、あてに、きよげに…　（同・八一）

⑥いと気高く、ものあざやかに、きよげなるさまして…
（同・一一七）

⑦女君、例の解けがたく、きよげなるさまにて、いとどうちしを
れたまへる、心恥づかしげにものものしき気色のあなづりにく
げなるも、言ひ知らずなつかしく、あはれげなりし火影はまづ(3)
思ひ出でられて…　（同・一四二）

と、『源氏』の葵の上を思わせるような、大人びた、近寄りがたい感じの女性であった。この葵の上との類似が、三角関係を可能にさせる最も大きな要素である。葵の上は他の女性の存在を許さず、源氏にも冷たく接した。大君も葵の上らしい女性だから、男君の女君思慕を知ったならば妹を妬むはずだし、夫婦仲もこじれるであろう――葵の上に相似的な大君の造型は、読者に『源氏』のパターンに沿った展開を予感させるし、実際その通りに物語は進んでいく。大君の造型は大君の嫉妬を必定にさせ、三角関係の可能性を物語に胚胎させて、宇治十帖のような展開の可能性を排除していくのである。

葵の上タイプなのでは、いくら美しくても、男君が大君に背を向け、女君の方を求めるのは仕方がない。宇治十帖の場合、いわゆる物語のヒロインらしさは宇治の中の君に付されていた。ところが宇治の大君と薫の恋が物語展開の軸なので、むしろ宇治の大君の方に存在感がある。たとえ妹の方が姉よりも美しくても、薫は宇治の大君を愛するため、宇治の中の君のヒロイン性がかすんでしまい、姉妹は並列的なのである。『寝覚』では、［1］のような大君の性格付けと、「らうたし」「なつかし」と形容される、可憐で柔和な女君とはあからさまな対照を見せている。とりわけ⑦は直接的で、大君の「解けがたく」「心恥づかし」い雰囲気は男君に敬遠され、女君の「なつかし」さを再確認させてしまう。大君が女君を際立たせ、姉妹の優劣は全面に押し出されていくのである。

とはいえ、大君の造型は単純ではない。なぜ葵の上のように気位が高いのか、その背景として、大君の、女君に対するコンプレックスを物語はさりげなく描き込んでいる。父に溺愛され、誰から見ても優れた妹に、大君は幼い頃から引け目を感じ、妬心を抱いてきたのであろう。特に、自分の楽器である琵琶を妹の方が上手く弾きこなすというのは、姉としての面目丸潰れであったはずである。決して憎悪の情ではないが、妹へのコンプレックスに苛まれたことは想像に難くない。[4] 大君は、天人の伝授を受けた妹が奏でる琵琶の音を聴いて驚き、次のように妹を羨んでいる。

［2］

「つねに(大君)弾きたまふ箏の琴よりも、これこそすぐれて聞こゆれ。昔よりとりわき殿の教へたまへど、つねにただたどしくてえ弾きとどめぬものを、あさましき君の御様かな」と聞きおどろき、うらやみたまふ。

（巻一・一九）

野口元大氏は、誇り高い大君が、傍線部のように口に出して妹を羨望したのは「よほどのことだったとしてよい」とされるが、[5] むしろ［2］のような体験を少女の頃から積み重ね、自尊心を傷つけられてきたせいで大君は過剰なまでに誇り高くなってしまったのであり、読者はこのような背景を心得ながら読み進め、大君の性格形成のありかたに頷くことになるのではないだろうか。男君の女君思慕が露見した時、大君が「昔より、殿の御心ざしの、あの君(＝女君)にはこよなくお

ぼし落としたれど、ことわり、親の御目にも、こよなくすぐれたまへる人の様なれば、いかでかおぼさざらむ」（巻二・一七四）と長兄左衛門督に訴えたことからも、少女時代からの心の傷の深さが看取されよう。常に妹への劣等感に苛まれていた大君は、立派な夫を迎えて初めて心の支えを見つけたのに、あっさりと女君に奪い取られてしまったのである。その屈辱は相当なものだったと推される。(6)

屈辱を受けた大君は、妹を遠ざけ、男君にも冷淡になり、そんな大君の態度に、男君の心はますます離れていくことになる。物語はこのような悪循環をしばらく描いた後、次にあげた場面で、三角関係の解消の可能性を潰していく。

[3]

①ₐものこまやかに、なつかしく愛敬づきてこそあらぬさまなれど、きよげなる御顔の、もののいみじく心やましかるべきまみ、いと赤くうつろひたるが、つねよりも、あなきよげと見ゆるは、さすがに目とどまりて、…〈中略〉…　（巻二・一八八）

②心恥づかしげにのたまふつれなさに、いとどものも言ひやらず、ほろほろと泣きたまひぬるを、「(男君)ᵇげに、いと若やかなる人の御上ならば、目とまるまじきを、すこしすくよかに、もの遠く、づしやかなる人の、忍びあへず心弱げなるぞ、いかばかりおぼえたまふことならむ」と思ふに、ᶜいと罪得がましく、いとほしく、あはれになりて、近くさし寄りて、いとなごやかにうち慰めたまふ気色の、なまめかしくめでたきを、「(大君)まいて、さばかりなる気色に、心を尽くしてあはれと見せたまふらむを、かの君もいかに思ふらむ」とのみおぼし寄るに、つゆも慰まず、いと妬きに、ᵈ涙のみ流れまさりて、

(大君)ᵉあま衣裁ちわかれなむと思ふにも
なに人わろく落つる涙ぞ…〈中略〉…

③(男君)ᶠかさねじと思ひたつともあま衣
この世とのみも君を頼むか
（巻二・一八八～一九〇）

夫が妹に心奪われていると知り、大君は男君を責める。誇り高い大君が激昂する姿を見て、男君は罪悪感にかられ、彼女をいたわしく思う。そのまま大君の許で男君が一夜を過ごす位だから、大君が見せたような落差 ― 大人の女性がふと見せる子供っぽさに、作者は少なからず魅力を見ていたのであろう。

[3]は[4]『源氏』夕霧巻、落葉宮に夢中の夕霧に雲居雁が嫉妬する場面が引用されており、(7) a～fは各々A～Fに対応している。

[4]

①(雲居雁ガ)起きあがりたまへるさまは、Aいみじう愛敬づきて、にほひやかにうち赤みたまへる顔、いとをかしげなり。「(夕霧)かく心幼げに腹立ちなしたまへればにや、…〈中略〉…」

②Bいと若やかに心うつくしう、らうたき心はたおはする人なれば、なほざりごととは見たまひながら、おのづからなごみつつものしたまふを、cいとあはれとおぼすものから…

③めでたうつくろひ化粧して出でたまふを、火影に見出だして、Dぬぎがたく涙の出で来れば、脱ぎとめたまへる単の袖をひき寄せて、

「E馴るる身をうらむるよりは松島の（雲居雁）
あまの衣に裁ちやかへまし」

④「F松島のあまの濡衣なれぬとて（夕霧）
ぬぎかへつてふ名を立ためやは」

（夕霧・六・八三～五）[8]

［4］ではA・Bのように顔を赤らめ「心幼げ」に興奮する雲居雁の「若やか」な魅力がクローズアップされているのに対し、［3］の大君もやはり赤味を帯びた目元が男君を惹きつけはするが、雲居雁とは反対にa・bと「愛敬」「若やか」さははっきりと否定されている。雲居雁の若々しさ・愛らしさは夕霧の心を動かすが、大君の場合は「愛敬」「若やか」さの欠如と不似合いな幼い振る舞いが大君の心弱さを際立たせ、男君に憐憫の情と自責の念を催させるのである。C・cは他の女性に心を奪われている夫が、妻に対して「あはれ」という思いを抱くところが、D・dは妻が涙する点が一致する。EとF、eとfも、ともに尼衣を素材としたやりとりになっている。小学館新編日本古典文学全集の頭注に「不信と猜疑から大納言と大君の心の溝は次第に深くなっていくが、憤りに興奮する大君に、常にない新鮮さを感じたり、日ごろたおやかな性質でないだけに、心弱く泣く姿が無性にいとおしく思われたり、といった機微がよく描かれている」（巻二・一九〇～一）と評されているように、改めて「なつかし」さの欠如を強調されつつも大君の個性が活かされ、夫婦の微妙な心的距離が上手く表現されている場面である。

元々可愛い人が拗ねて可愛いのは当然。それよりも普段、拗ねそうにない人が拗ねるという意外性が良いのではないか―このような思いつきが、作者にはあったのだろうか。雲居雁の可愛らしさが加工されて大君に付与され、大君の嫉妬は単なるヒステリーに止まらなかった。bの男君の心中思惟にあるように、目前の大君の感情的なありようと、普段の落ち着きぶりとのギャップが魅力となって男君の心に訴えかけ、そのまま大君の許で一晩過ごすという展開を導いていく。ただ、それは一時的に男君の気を引いただけで、結局、夫婦の仲は修復しがたいものになってしまう。翌朝、弁の乳母がこれ見よがしの言葉を女君方に投げつけるのを男君が不愉快に思い、止めさせよと大君に言いかけても、大君は制するどころか冷たく突っぱね、「見聞くことなれば、言うにこそあらめ。聞きにくかるべきことならば、おぼし寄るまじくこそあらましか」（巻二・一九一）と言い放つ。男君にしてみれば、昨夜で大君を懐柔できたと思い込

んでいたし、せっかくわざわざなだめてやったのにという驕りもあり、今朝の大君の態度に怒り、自己嫌悪し、大君に遠慮する必要などないと開き直ってしまう。昨夜の大君を愛おしく思ってしまったからこそ、自分は悪くないという思いを増幅させてしまうのである。[9]

一歩もひかない大君の姿には、もはや宇治の大君の片鱗すら見えない。少しは状況が良い方へ向かうかと思わせておいて、三角関係を強化し、『寝覚』の姉妹は宇治の姉妹とは全く別のものとして物語に根付いていく。[10] 宇治の大君、葵の上、雲居の雁…と、幾重にも『源氏』の女君を重ねられてはいても、大君は『源氏』の女君の寄せ集めになるどころか、矛盾することなく大君らしさを形成し、それによって『寝覚』独自の姉妹関係を築いているのである。

加藤史子氏[11]が指摘されたように、確かに大君は、とりあえずの所は、主に女君と男君の間を阻む障害であり、女君の引き立て役であればよかったのであろう。それでも、現存部分をみるだけでも単に妹を許せない姉だけで終わってはいないし、散逸した第二部、女一宮降嫁への苦悩や小姫君の出産が描かれていく過程で、さらに大君の造型が深さを得ていた可能性もある。積極的に読み込めば、「大君物語」なるものを認められるのかもしれない。宇治の大君が美しい中の君を妬んだりもせず、すすんで中の君を保護するありかたよりも、この『寝覚』の大君の方が如何にも現実にありそうで、読者の共感を得たのではないだろうか。蕨を拒み、自分の幸せではなく妹を第一に考える宇治の大君の造型には観念的な色合いが強いが、『寝覚』の大君は妹に嫉妬したり、心情を思いのまま吐き出したりと、人間味があって、女性としての生々しさをもっている。大君の妹への劣等感が匂わされることによって、姉妹関係のありかたが宇治十帖よりも現実的なものになっているのである。

二、宇治十帖への依存 ― 姉妹の「昔」 ―

次に、宇治十帖の表現を取り入れ、宇治十帖の世界に密着しながらも、宇治十帖とは似て非なる姉妹関係を描出するのに成功している例をとりあげたい。

[5]

端に出でて見渡したまへれば、今日を限る心地して、なにの草木も目とまるに、年ごろあの御方ともろともに、明け暮れながめつつ、故上の御面影の我はおぼえぬを、言ひ出でなどしたまひつつ、月をも花をももろともにもてあそび、g琴の音をも同じ心に掻き合はせつつ過ぎにし昔の、恋しきに、「残りなく飽き果てられぬる世なれば、いよいよ山より山にこそ入りまさらめ。またしも帰り見じかし」とおぼすに、h池に立ち居る鳥どもの、同じさまに一番なるもうらやましきに、i涙のみこぼれつつ、(女君)

j立ちも居も羽をならべし群鳥の

かかる別れを思ひかけきや（巻二・一九六～七）

広沢に移る直前、女君が、姉と自分を目前の水鳥の番いによそえた歌を呟く場面である。この場面については、池田和臣氏の「姉君と疎遠になった寝覚の君の孤独と、北方にさきだたれ男手ひとつで姫君をそだてる宇治八宮の悲愁とが、ともに池の水鳥を素材にしてあい似た表現でかたどられている」との指摘があるが[12]、他にも橋姫巻と対応する部分がある。

[6]

春のうららかなる日影に、H池の水鳥どもの、羽うちかはしつつ、おのがじしさへづる声などを、常ははかなきことに見たまひしかども、つがひ離れぬをうらやましくながめたまひて、君たちに、御琴ども教えきこえたまふ。Gいとをかしげに、小さき御ほどに、とりどり掻き鳴らしたまふ音ども、あはれにをかしく聞こゆれば、

I涙を浮けたまひて、

I1うち捨ててつがひさりにし水鳥の（宇治八宮）
かりのこの世にたちおくれけむ

心尽くしなりや」と、目おしのごひたまふ。〈中略〉

J2いかでかく巣立ちけるぞと思ふにも（宇治ノ大君）
憂き水鳥の契りをぞ知る〈中略〉

J3泣く泣くも羽うち着する君なくは（宇治ノ中ノ君）
われぞ巣守になりは果てまし

（橋姫・六・二六〇～一）

水鳥の番いを見て我が身を振り返るh、孤独をかみしめて涙するiはH・Iの宇治の八宮と重なるし、[5]二重傍線部も宇治への隠遁を思わせるが、ここでは大君・女君姉妹に、宇治の姉妹が重ねられていることに目を向けたい。gにはGの幼い宇治の大君・中の君が頼りあい、仲良く合奏しながら日々を送る様子が引かれている。水鳥の番いはJ1・2・3歌では宇治の八宮夫妻だが、jでは大君・女君の姉妹がよそえられている。普通、水鳥の番いとあれば夫婦によそえるところを、姉妹にずらして橋姫巻の場面をはめ込んだのである。『寝覚』の場面としてだけみれば、野口氏が述べられた通り「世間の常識とも和歌の約束ともまったくかけ離れた、こういう特殊なヒロインの意識は、彼女が、いまだにどれほど未成熟で、ひたすら肉親間の愛に飢えているかを、よく物語っている」のではあるが[13]、橋姫巻の引用を積極的に読み込んでみたい。

宇治十帖には姉妹の仲の良い様子が描かれていたが、『寝覚』には大君・女君の仲の良さを描いた場面がほとんどない。大君が女君を見舞ったり（巻一・一〇一）、病状を案じたり（巻二・一六〇）といった条もあるのだが、その際の大君の様子はとりたてて描かれていない。そのせいで、大君が女君の病を本当に気にしていたのか、本文からあまり伝わってこないのである。妹よりも自身の結婚にばかり気を取られているような印象が拭えない。その原因は女君に対する劣等感を、読者に想像させるよう描かれてきたことにある。

前節でもみたように、大君の劣等感は直接的には語られず、女君の方も大君から向けられた嫉妬について意識している様子はない。それどころか、姉を無邪気に慕っているような感がある。あからさまにではないが、物語は姉妹のすれ違いを匂わせながら進められてきたのであった。それが［5］では、女君の置かれた状況をより深刻なものに演出したいがために、姉妹の仲の良かった頃のエピソードを挿入し、過去と現在を対比する方法をとった。幸せな「昔」の回想によって、女君の心細さを強調しておきたい。でも、今まで姉妹の睦まじさは描かれていなかった。女君の回想の中に「かやうなるほどは、琴掻き合はせ、何となく思ふことなかりし、いつなりけむ」（巻一・八三）と宇治の姉妹を髣髴させるような箇所はあるものの、[14] ここにもってくるのに適当な「昔」の場面がない―そこで宇治の姉妹の少女時代の挿話が取り込まれ、『寝覚』には描かれてこなかった大君と女君の「昔」が具象化された。このような作者の意図を汲むことはできないだろうか。悲劇が起こるずっと以前の、睦まじかった頃の思い出が、橋姫巻の引用によって補完されたのである。「故上の御面影の我はおぼえぬを、言ひ出でなどしたまひつつ」―女君は大君に記憶にない母のことを語ってもらいながら、亡き母の面影を姉に重ね見たりもしていたのだろうか。大君も元々、女君を憎んでいた訳ではない。穏やかな時もあったのだ。「昔」は宇治の大君・中の君のように仲良かったはずなのに、それが今は―このように、読者が橋姫巻をイメージするのを期待したと考えられるのである。

橋姫巻の引用は女君の孤独をかたどるだけではなく、二つの姉妹の落差を示すことで宇治十帖と『寝覚』の世界の差異を浮き彫りにする効果もあげていよう。橋姫巻を取り込んだことで、『寝覚』の足りない部分が満たされつつも、同時に三角関係や家族内の確執、姉妹の亀裂が宇治の八宮家の穏やかさによって炙り出されている。『寝覚』は宇治十帖とは異なる物語を開拓しながら、同時に宇治十帖に頼ってもいるのである。『源氏』の引用を介し、作者と読者が互いに了解しあうことで物語に奥行きがもたらされていく『寝覚』の構成のありかたがみてとれよう。

［5］は『無名草子』において「心尽くしなるといふ中に、身に染みておぼゆるふしぶし」（二二五）の一つとして評価されている。[15] 『無名草子』の作者ならば、［5］の『源氏』引用に気付いていたに違いあるまい。とりたてて評言がないので『無名草子』作者が［5］を具体的にどのように見ていたのかは不明であるが、『源氏』引用が一目瞭然の［5］が、「心尽くしなるといふ中に、身に染みておぼゆるふしぶし」とされているのは興味深い。これは、たとえ『源氏』の影を色濃く落としてはいても、［5］は『寝覚』の場面として成立していると『無名草子』作者から認められていたことを意味するのであろうか。『無名草子』の「物語取り」観を今、明らかにはできないが、問題点として提示しておきたい。

三、『寝覚』の美意識 ― 女君の勤行姿 ―

『寝覚』には宇治十帖の表現・描写を用いていながらも、宇治十帖の沈鬱な趣とは正反対に、華やかさを演出しようとする姿勢が見い出せる。前節でもみたように、宇治の八宮家と『寝覚』の源氏太政大臣家とは、全く異なる状況にある。源氏太政大臣家は、八宮家とは違って世間から尊敬されているし、裕福で、現存部分を見る限り、経済的な問題は全く出てこない。深刻な家庭内不和を描いてはいても、どこかしら物語世界に明るさがあるのはこの豊かさゆえであろう。「不遇で、貧しいながらも仲の良い家族」の宇治の八宮家と、「社会的地位もあり、豊かではあるが、仲違いをする家族」の太政大臣一家は、対照的である。

裕福であるから、当然、宇治の姉妹とは違って『寝覚』の姉妹は美しい衣装を纏っている。この衣装描写もまた、物語世界に華やかさをもたせている要因といえようが、『寝覚』は必要以上に衣装描写に固執しているようにうかがえる。例として、妊娠し、床に伏せる女君を、宰相中将が見舞う場面をみてみたい。

[7]

k桜なる御衣どもの上に、蘇芳の濃く薄き重ねて、いとつややかなる御衾を押しやりて、l雛を作り臥せたらむやうに、御衣の限り、身もなくて見えたるに、mうちやられたる御髪の裾は、ふさやかにこちたくて、顔を引き入れて臥したまへるがいみじくあはれげなるに、…

（巻二・一一四）

ここは、池田和臣氏[17]・鈴木紀子氏[18]が指摘されたように、亡くなる直前の宇治の大君の、

[8]

K白き御衣どものなよびやかなるに、衾を押しやりて、L中に身もなき雛を臥せたらむここちして、M御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたる際の、つやつやとめでたうをかしげなるも、いかになりたまひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが、惜しきことたぐひなし。

（総角・七・一〇七～八）

が参考にされているのだが、[8]と異なる点が二つある。一つは、『源氏』がk「白き御衣どものなよびやかなるに、衾を押しやりて」とあるのに対し、『寝覚』ではK「桜なる御衣どもの上に、蘇芳の濃く薄き重ねて、いとつややかなる御衾」と、病床にありながら衣装や衾が豪奢な点である。二つめは、髪の描写である。宇治の大君の髪は度重なる心労や病でM「いとこちたうもあらぬほど」に痩せ細り、ただ「つやつやと」した質感が賞賛されている。『寝覚』の女君の髪はm「ふさやかにこちたくて」と、衰えが見えない。

宇治の大君は「風いたう吹きて、雪の降るさまあわたたしう荒れまどふ」（同一〇五）ような、荒涼とした宇治の風景に溶けこんで

いくが如く「見るままにものの枯れゆくやうにて消え果て」（同一〇九）ていく。宇治十帖は、衰えは衰えとしてそのままに、死していくありかたに美を発見していたのである。そのような宇治十帖の表現を使ってはいても、『寝覚』は宇治十帖の美意識は踏襲してはいない。『寝覚』の女君は心痛と妊娠のために床につき、毎日鬱々とした生活をしているのに、髪は豊かなままだし、容色も衰えない。そんな女君の美は、豪華な衣装によってさらに演出されている。[16]『寝覚』は不自然を犯しながらも、女君に、いわゆる典型的な「お姫様らしさ」を演出しているのである。これは、『寝覚』には、女主人公は王朝の規範に即した美しい女性―容姿端麗で優しく、髪は長く豊かで、きらびやかな衣装を纏った女性―であるべきという意識が強くあるということであろう。[19]

次にあげる［9］も、宇治十帖の表現を『寝覚』の美意識に沿って変奏させたものと思われる。新年を迎え、宰相中将は、大君方に疎まれて広沢に移った女君を訪問する。女君方は勤行に心を傾け、もの静かな様子であった。

［9］

例の世の人ざまにて居たまひたらば、心やすくもあるべきを、n桜、梅の御衣どものうへに、紅梅の固織物の小袿着たまひて、萌葱だちたる帯を、はかなげにうち掛けて、行ひしたまひけるなめりと見ゆるを、o恥づかしとおぼして、p数珠などひき隠して、もて紛らはしたまへるさまの、なほめづらかなる光添ひたまへる心地して、あさましきまでうつくしげなるを見るに、「あたらし。いかにすべき人の御身ぞ」と目もくるるやうにおぼゆれば、qものも言はで見まはしたまふ。（巻一・二一八～九）

女君は兄の不意の来訪に恥ずかしがって数珠等を隠す。そのあまりの美しさに宰相中将は感動し、彼女の不幸を痛ましく思う。人を惹きつける柔らかな女君の趣は大君の頑なな態度と対照され、女君の卓越した美質が描かれている。広沢訪問の直前、大君の角々しい態度に手を焼いた宰相中将にとって（巻二・二一六～七）、女君の態度は強く心に訴えるものであろう。同情や憐みが相俟って、宰相中将は改めて女君の身の上を案じずにはいられない。

池田和臣氏は［9］k「帯」を「はかなげに」して勤行する女君の姿は入水直前の浮舟の姿の、

［10］

N1ものはかなげに帯などして経読む。親に先だちなむ罪うしなひたまへ、とのみ思ふ。（浮舟・八・九三）

によるとされる。[20] N1のみならず、姉の夫との関係に苦しみ、山里で仏道に心を傾けるというのも浮舟に似ているが、［9］は、次の宇治の中の君・女三宮とも類似を見せていよう。

［11］

濃き鈍色の単に、萱草の袴のもてはやしたる、なかなかさまかは

りてはなやかなりと見ゆるは、着なしたまへる人からなめり。N2帯はかなげにしなして、P1数珠ひき隠して持たまへり。〈中略〉かたはらめなど、あならうたげと見えて、にほひやかに、やはらかにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて、うち嘆かる。

（椎本・六・三五〇）

［12］

宮の御前に参りたまへれば、いと何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、OはぢらひP2もて隠したまへり。Q何かは知りにけりとも知られたてまつらむ、など、心に籠めて、よろづに思ひゐたまへり。

（橋姫・六・三〇〇～一）

［11］は椎本巻、喪中の宇治の中の君を薫が垣間見する場面である。kとK2、mとM1は表現が一致する。山里を訪れた男性が女性を目にし、そのあまりの美しさに感嘆するという場面の枠組みも同じである。［12］は橋姫巻の末尾である。出生の秘密を知った薫は参内する気にもなれず、母女三宮の許を訪れた。勤行中だった女三宮は恥じらい、経を隠してしまう。それを見て薫は、N自分が秘密を知ったなどと母には到底明かせないとの思いに耽る。［9］l・mの女君の仕草は、女三宮のL・M2を思わせよう。相変わらず女三宮は頼りなげだが、おっとりとした所は彼女らしい魅力でもある。「いと何心もなく、若やか」な女三宮の恥じらう仕草には、密通という罪とはかけ離れた、天真爛漫さが匂い立つ。それ故に母の不義を知った薫もただ黙するしかない。この薫のありかたも、n事情を知る宰相中将が何も言わずに妹を見守る態度と照応するのではないか。

ただ、『源氏』と違うのは、衣装の描写である。［11］の宇治の中の君の場合、地味な喪服が彼女の生来備わった美質を引き立たせ、普通の衣よりかえって「はなやか」な印象さえ薫に与えていた。『源氏』は本来、装飾的な役割をもたない喪服を着た姿に美を発見していたのだが、『寝覚』は勤行には、これもまた、不似合いなまでにあでやかな衣装で女君を演出している。これもやはり、あくまで女主人公は美しい衣こそが相応しい、見目麗しき「お姫様」であるべきという『寝覚』の美意識のあらわれなのではないだろうか。場面のリアリティよりも、女君を物語のヒロインらしく飾ることを優先させているようである。

以上のように、『寝覚』は宇治十帖の表現・描写をただ貼り付けるのではなく、良しとしない要素は排斥する、もしくはアレンジして宇治十帖の趣を払拭し、『寝覚』なりの世界を構築しようとしていよう。宇治十帖に添いながらも、『寝覚』は『寝覚』らしくあろうとするのである。

結

『寝覚』にとって、宇治十帖は『寝覚』独自の物語世界を紡ぐための糧といえようか。とはいえ、決して『寝覚』は宇治十帖に全てを委ねている訳ではない。宇治十帖をベースにしながら、意識的に宇治十帖の要素を取捨選択し、『寝覚』は宇治十帖の世界から離陸していく。宇治十帖の引用によって読者が想起するものを誘導し、また、制限をもする。『寝覚』は宇治十帖の世界から脱却し、時には読者の想像力を利用して宇治十帖に依存しながら、『寝覚』世界を創出するのである。『寝覚』はたとえ宇治十帖と不可分にあり、宇治十帖の引用を重ねても、その効果が『寝覚』らしさに収斂していくよう、操作しているのである。

[注]

(1) 永井和子氏「宇治十帖と寝覚物語—作者と読者の問題—」(『続寝覚物語の研究』笠間書院　平2)

(2) 鈴木紀子氏「『夜の寝覚』と『源氏物語』宇治の姉妹—同母姉妹への関心—」(『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院　平13・11)

(3) 『夜の寝覚』本文の引用は小学館「新編日本古典文学全集」(鈴木一雄校注・訳)による。なお、末尾の(　)内に巻・頁数を付記し、注記・符号・傍線部等を私に付した。

(4) このような大君の女君へのコンプレックスに関しては古谷道子氏「『寝覚』天人事件の性格」(『国文』第17号　お茶の水女子大学国語国文学会昭37・7)が指摘されている。

(5) 野口元大氏「『夜の寝覚』第一部の構造」(『夜の寝覚研究』笠間書院　平2)

(6) 野口元大氏は「自負心の最後の拠り所が脅かされて、彼女の怒りは、本質的には恐怖の悲鳴の変形だったのであり、さらには、これまで表面に出ることができぬままに蓄積されてきた劣等感や怨念が加わって、その深刻さは他人の窺い知ることのできないほどのものがあったのである」と述べられている。同右論文。

(7) 管見によれば、[3]の『源氏』夕霧巻の引用に関して、先行の具体的な指摘はない。

(8) 『源氏物語』本文の引用は「新潮日本古典集成」(石田穣二清水好子校注)による。末尾の(　)内に巻・頁数を付記し、注記・符合・傍線部等を私に付した。

(9) 野口元大氏「『夜の寝覚』第一部の構造」(『夜の寝覚研究』笠間書院平2)は「男の側の甘さによる計算違いなのであるが、すっかり仲直りができたつもりだった男にとっては、これは、自分への裏切りであり、反逆としか感じられない。彼は、これをばねとして、自分の感情を、さらには妻を裏切った行為をも正当化してしまう」と述べられている。

(10) ただ、改作本『寝覚』や『無名草子』によれば、散逸した第二部、女君が老関白と結婚後、姉妹は和解したようである。その時の仲の良いありようは、宇治の姉妹を思わせるものであったかもしれない。

(11) 加藤史子氏「『寝覚物語』における「大君」考」(『日本文学研究』第28号　大東文化大学日本文学会　平1・2)は、大君が女君の美しさを引き立てていくありかたを指摘されている。

(12) 池田和臣氏「源氏物語の水脈—浮舟物語と夜の寝覚—」(『国語と国文学』東京大学国語国文学会　昭59・11)。

(13) 野口元大氏は前掲(6)論文で、「世間の常識とも和歌の約束ともまっ

たくかけ離れた、こういう特殊なヒロインの意識は、彼女が、いまだにどれほど未成熟で、ひたすら肉親間の愛に飢えているかを、よく物語っている」と述べられている。

(14) 「4」以後においても、姉妹の仲の良かった過去は「幼うより、またなう思ひ睦れならはしきこえしかば、吹く風につけても、まづ思ひ出できこえぬ時の間なく、恋しく」(巻二・二二一)と、女君の回想の中で語られている。

(15) 『無名草子』本文の引用は、小学館「新編日本古典文学全集」『松浦宮物語 無名草子』(樋口芳麻呂 久保木哲夫校注・訳)により、末尾の( )内に頁数を付記した。

(16) ただし「7」は、女君に、『源氏』の女三宮が、桜の衣を着こなせない姿を重ねる効果を狙ったものでもあろう。これに関しては拙稿「『夜の寝覚』の「鶯」―『源氏物語』引用の方法の一断面―」(『古代中世国文学』第16号 広島平安文学研究会 平12・12)で論じている。

(17) 前掲(12)論文。

(18) 前掲(2)論文。

(19) 王朝の規範的な美意識から外れた『源氏』のありかたについては、河添房江氏「『源氏物語』の髪についての断章―王権・ジェンダー・身体・エロス」(『物語研究会会報』第25号 平6・8)、三田村雅子氏「浮舟の〈衣〉―贈与と放棄をめぐって―」(『新講源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社 平7)が論じておられる。また、三田村雅子氏「黒髪の源氏物語」(『源氏研究』第1号 平8 翰林書房)は、後期物語は『源氏』以前の『宇津保物語』『落窪物語』といった前期物語と同じく、ヒロインは長く豊かな髪であるべきという意識があると指摘されている。衣装に関しても、ヒロイン=豪華な衣装という図式は、やはり『落窪』のような『源氏』以前の物語と同様に、王朝の美の規範を踏んでいるとみられる。なお、『寝覚』の髪に関しては、拙稿「『夜の寝覚』における髪の表現―『源氏物語』宇治十帖の引用を糸口に―」(『国文学攷』第170号 広島大学国語国文学会 平13年6月)で論じている。

(20) 前掲(12)論文。

―あかさこ・しょうこ、本学特別研究員―